島根大学医学部紀要，第43巻，25～32頁，2021年３月

研究報告

看護学生と看護師の排泄援助に対する倫理的ジレンマ

（排泄援助／倫理的ジレンマ／看護学生／看護師）

柳楽桃香[1)]・日野佳菜恵[2)]・小笹美子[3)]・新宅真衣[1)]・太田来奈[1)]・神庭芽依[1)]

The Ethical Dilemma of Nursing Students and Nurses for Excretion Assistance

（excretion assistance / ethical dilemma / nursing students / nurses）

Momoka NAGIRA, Kanae HINO, Yoshiko OZASA,
Mai SHINTAKU, Rana OHTA, Mei KANBA

【要旨】**目的**：倫理的配慮のある排泄援助につなげるために、看護学生と看護師の排泄援助に対する認識と倫理的ジレンマを明らかにし、看護学生に対する排泄援助に関する教育の充実を図ることである。**方法**：A大学医学部看護学科３、４年生114名、B病院において排泄援助の頻度が高い４病棟の看護師120名を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は基本属性、排泄援助の見学・経験の有無、自らの倫理観に関する認識、排泄援助に対する認識、倫理的行動の実践状況、排泄援助における倫理的ジレンマの有無・内容である。看護学生と看護師の比較を行った。**結果**：回収率は63.2%（148名）、うち146名を有効回答とした。排泄援助における倫理的ジレンマが「ある」と回答した者は看護師において有意に高かった（$p < 0.001$）。倫理的配慮のある排泄援助には、排泄援助の経験と看護倫理に関する学習が有効である。

Ⅰ．はじめに

排泄は人が生存するための基本的ニードであり、排泄援助は人間の尊厳に関わる援助である[1)]。看護学生は排泄援助に関するプライバシーや羞恥心に対する配慮などから実習中に排泄援助を躊躇することが多く[2)]、看護学生は臨床実習において、教育と臨床のギャップ、患者と学生の関係性、知識・経験不足[3)]に倫理的ジレンマを感じていることが明らかになっている。一方、排泄援助を行う看護師は業務上の対応困難やスタッフの意識の低さを理由に、患者のニードを満たした排尿援助が出来ていない[4)]などの排泄援助の現状に問題意識を持っており、理想とする排泄援助提供ができていないことにジレンマを感じている[5)]。看護学生と看護師はそれぞれの立場で排泄援助に対し、ジレンマに感じていると考えられる。本研究では、看護学生と看護師の排泄援助に対する倫理的ジレンマを明らかにし、自らの責任の下で排泄援助を行っている看護師との排泄援助に対する認識の差を埋めるような排泄援助の教育の充実を図ることで、倫理的配慮のある排泄援助につながると考えた。

本研究における排泄援助とは、病棟で看護師／看護学生が行う患者の日常生活動作に該当するトイレ排泄、ポータブルトイレ、床上排泄、おむつ交換に関連した排泄の看護援助とする。また、倫理的ジレンマとは、看護師、看護学生が実施している看護を見学・実施した際に、その看護援助に対して疑問を抱き判断や対処方法について困ったり、葛藤を覚えたりすることとする。

Ⅱ．研究目的

倫理的配慮のある排泄援助につなげるために、看護学生と看護師の排泄援助に対する認識と倫理的ジレンマを明らかにし、看護学生に対する排泄援助に関する教育の充実を図ることである。

[1)] 島根大学医学部看護学科（所属は論文受付時の所属）
School of Nursing, Fuculty of Medicine, Shimane University
[2)] 島根大学医学部臨床看護学講座
Department of Clinical Nursing, Faculty of Medicine, Shimane University
[3)] 島根大学医学部地域・老年看護学講座
Department of Community Health and Gerontological Nursing, Faculty of Medicine, Shimane University

Ⅲ．研究方法

１．調査対象

臨地実習を経験したA大学医学部看護学科３年生58名、看護学科４年生56名、B病院において排泄援助の頻度が高い４病棟の看護師120名である。

２．調査期間

調査は2019年７月～2019年８月の期間に行った。

３．調査方法

無記名自記式質問紙調査を行った。看護学生は授業終了後に調査票を配布し、大学内に設置した回収箱にて回収した。看護師は、各病棟の看護師長を通じて調査票を配布し、休憩室に設置した回収箱にて回収した。

４．調査内容

調査内容は基本属性（所属、年齢、看護師経験年数、看護教育機関）、排泄援助を受けた経験の有無、排泄援助の見学・経験の有無、自らの倫理観に関する認識、看護倫理の学習経験の有無・内容、排泄援助に対する認識について二重作ら[1]を参考に自作した７項目、倫理的行動の実践状況について工藤ら[6]を参考に自作した27項目、排泄援助における倫理的ジレンマの有無・内容について中嶋ら[5]を参考に自作した13項目である。

５．分析方法

看護学生と看護師の２群に分類し、自らの倫理観に関する認識、排泄援助を受けた経験の有無、排泄援助の経験・見学の有無、看護倫理の学習経験の有無・内容、排泄援助に対する認識、排泄援助における倫理的ジレンマの有無との関連を見るためにχ^2検定を行った。

また、倫理的行動の実践状況についての27項目は「いつもする」を５点から、「考えたこともない」を１点と配点し、５段階で回答を求めた。排泄援助の「経験あり」と答えた看護学生57名、看護師49名を対象にMann-WhitneyのU検定を行った。排泄援助における倫理的ジレンマの内容についての13項目は「非常に当てはまる」を５点から、「全く当てはまらない」を１点と配点し、５段階で回答を求め、「倫理的ジレンマあり」と答えた看護学生32名、看護師38名を対象にMann-WhitneyのU検定を行った。すべての統計における有意水準は$p < 0.05$を統計学的有意とし、有意確率の強さは、$p < 0.05$、$p < 0.01$、$p < 0.001$を用いた。検定には統計解析ソフトIBM SPSS Statistics Version 22を用いた。

６．倫理的配慮

調査票配布時に調査の目的と合わせ、調査は自由意思に基づき、参加・不参加に関わらず不利益を生じることはないこと、調査票は無記名で行うため個人のプライバシーは保護されること、調査結果は卒業研究発表会や学会にて公表の予定があることなどを文書にて説明した。看護学生には口頭でも説明した。調査票は研究発表後、シュレッダーにて破棄することとし、調査票の回収をもって同意が得られたものとした。本調査は島根大学卒業研究倫理審査の承認（2019年６月）を得て実施した。

Ⅳ．結　　果

看護学科３年生54名（回収率93%）、看護学科４年生44名（回収率78%）、看護師50名（回収率41%）から回答を得た。排泄援助の認識について未記入がある看護学科生１名、看護師１名を除外した計146名を有効回答とした。

１．対象者の特性

排泄援助を受けた経験について「ある」と回答した看護学生は７人（7.2%）、看護師は10人（20.4%）であり、看護学生と看護師の間に有意差が認められた（$p = 0.019$）。受けた排泄援助の内容は、バルーンカテーテルの挿入・留置・抜去、導尿、浣腸、陰部洗浄、尿器・便器の使用、ポータブルトイレでの排泄であった（表１）。

看護倫理の学習経験があると回答した者の学習方法として、看護学生では「授業の一部」が95人（97.9%）、看護師では「授業の一部」「倫理カンファレンス」がそれぞれ26人（53.1%）で最も多かった。「ない」と回答した者はいなかった。５項目の合計を比較したところ、看護学生は平均1.17個、看護師は平均1.79個の項目を選択しており、倫理の学習について看護師の方が多くの方法で学習していた。

「倫理的配慮ができているか」に対して、看護師の方が「そう思う・どちらかというとそう思う」の回答が多く、看護学生では15%以上の人が「分からない」を選択していた。また、「倫理的問題を認識できているか」についても看護師の方が「そう思う・どちらかというとそう思う」と回答する者が多かった。

２．排泄援助に対する認識について

排泄援助に対する認識は表２に表した。「大変だと思う」に対して、看護学生は「そう思う」が65人（67.0%）、「どちらかと言うとそう思う」が30人（30.9%）、「どちらかというとそうは思わない」２人（2.1%）であり、

表１　対象者の特性

項目	カテゴリー	人（%）	
		看護学生 n = 97	看護師 n = 49
年齢		平均20.9 ± 0.8歳	平均32.1 ± 10.0歳
看護師経験年数		なし	平均10.6 ± 9.5年
看護基礎教育機関	在学中	97(100.0)	0(0.0)
	医療系大学	0(0.0)	16(32.7)
	看護系単科大学	0(0.0)	4(8.2)
	専門学校	0(0.0)	28(57.1)
	その他	0(0.0)	1(2.0)
看護倫理の学習経験（複数回答）	看護倫理学	0(0.0)	20(40.8)
	授業の一部	95(97.9)	26(53.1)
	倫理カンファレンス	17(17.5)	26(53.1)
	倫理に関する研修	0(0.0)	12(24.5)
	その他	1(1.0)	0(0.0)
	不明	0(0.0)	2(4.1)
	学習経験なし	0(0.0)	0(0.0)
排泄援助の経験・見学	経験あり	57(58.8)	49(100.0)
	見学のみ	26(26.8)	0(0.0)
	ない	14(14.4)	0(0.0)
排泄援助を受けた経験	ある	7(7.2)	10(20.4)
	ない	88(90.7)	38(77.6)
	不明	2(2.1)	1(2.0)
倫理的配慮ができているか	そう思う	10(10.3)	5(10.2)
	どちらかというとそう思う	46(47.4)	37(75.5)
	どちらかというとそうは思わない	20(20.6)	6(12.2)
	そうは思わない	4(4.1)	0(0.0)
	分からない	15(15.5)	1(2.0)
	不明	2(2.1)	0(0.0)
倫理的問題を認識できているか	そう思う	12(12.4)	7(14.3)
	どちらかというとそう思う	63(64.9)	35(71.4)
	どちらかというとそうは思わない	13(13.4)	6(12.2)
	そうは思わない	2(2.1)	0(0.0)
	分からない	7(7.2)	0(0.0)

表２　排泄援助に対する認識

						看護学生　n = 97（%）
						看護師　n = 49（%）
項目		そう思う	どちらかと言うとそう思う	どちらかと言うとそうは思わない	そうは思わない	p値
1．大変だと思う	看護学生	65(67.0)	30(30.9)	2(2.1)	0(0.0)	< 0.001***
	看護師	12(24.5)	24(49.0)	8(16.3)	5(10.2)	
2．嫌だと思う	看護学生	22(22.7)	50(51.5)	25(25.8)	0(0.0)	< 0.001***
	看護師	6(12.2)	13(26.5)	16(32.7)	14(28.6)	
3．仕事だから仕方ないと思う	看護学生	37(38.1)	48(49.5)	12(12.4)	0(0.0)	< 0.001***
	看護師	12(24.5)	20(40.8)	9(18.4)	8(16.3)	
4．慣れたらいけないと思う	看護学生	21(21.6)	40(41.2)	29(29.9)	7(7.2)	0.916
	看護師	12(24.5)	21(42.9)	12(24.5)	4(8.2)	
5．看護業務として誇りに思う	看護学生	6(6.2)	35(36.1)	54(55.7)	2(2.1)	0.174
	看護師	3(6.1)	18(36.7)	23(46.9)	5(10.2)	
6．責任ある仕事だと思う	看護学生	35(36.1)	56(57.7)	6(6.2)	0(0.0)	0.573
	看護師	17(34.7)	28(57.1)	3(6.1)	1(2.0)	
7．倫理的配慮は重要だと思う	看護学生	86(88.7)	11(11.3)	0(0.0)	0(0.0)	0.019*
	看護師	36(73.5)	13(26.5)	0(0.0)	0(0.0)	

χ^2検定（*p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001）

看護師は「そう思う」が12人（24.5%）、「どちらかと言うとそう思う」が24人（49.0%）、「どちらかというとそうは思わない」が８人（16.3%）、「そう思わない」が５人（10.2%）で、看護学生で大変だと思う者が有意に高かった（$p < 0.001$）。

「嫌だと思う」に対して、看護学生は「そう思う」が22人（22.7%）、「どちらかと言うとそう思う」が50人（51.5%）、「どちらかと言うとそうは思わない」が25人（25.8%）であり、看護師は「そう思う」が６人（12.2%）、「どちらかと言うとそう思う」が13人（26.5%）、「どちらかと言うとそうは思わない」が16人（32.7%）、「そうは思わない」が14人（28.6%）で、看護学生で嫌だと思う者が有意に高かった（$p < 0.001$）。

「仕事だから仕方ないと思う」に対して、看護学生は「そう思う」が37人（38.1%）、「どちらかと言うとそう思う」が48人（49.5%）、「どちらかと言うとそうは思わない」が12人（12.4%）であり、看護師は「そう思う」が12人（24.5%）、「どちらかと言うとそう思う」が20人（40.8%）、「どちらかと言うとそうは思わない」が９人（18.4%）、「そうは思わない」が８人（16.3%）で、看護学生で仕事だから仕方ないと思う者が有意に高かった（$p < 0.001$）。

「慣れたらいけないと思う」に対して、看護学生は「そう思う」が21人（21.6%）、「どちらかと言うとそう思う」が40人（41.2%）、「どちらかと言うとそうは思わない」が29人（29.9%）、「そうは思わない」が７人（7.2%）であり、看護師は「そう思う」が12人（24.5%）、「どちらかと言うとそう思う」が21人（42.9%）、「どちらかと言うとそうは思わない」が12人（24.5%）、「そうは思わない」が４人（8.2%）で、有意差は認められず、看護学生と看護師とでは「慣れたらいけない」という気持ちに差はなかった。

「倫理的配慮は重要だと思う」に対して、看護学生は「そう思う」が86人（88.7%）、「どちらかと言うとそう思う」が11人（11.3%）、であり、看護師は「そう思う」が36人（73.5%）、「どちらかと言うとそう思う」が13人（26.5%）、「どちらかと言うとそうは思わない」「そうは思わない」と回答した者はいなかった。看護学生の方が有意に倫理的配慮を重要だと感じていた（$p = 0.019$）。

３．倫理的ジレンマについて

排泄援助における倫理的ジレンマの有無について、「あり」と回答した者は看護学生では32人（33.0%）、看護師では38人（77.6%）であった。看護師は看護学生と比べて倫理的ジレンマを感じたことがあると回答した割合が有意に高かった（$p < 0.001$）。また、排泄援助の経験がある者（$p < 0.001$）や、「看護倫理学（$p < 0.001$）」「授業の一部（$p = 0.011$）」「倫理カンファレンス（$p < 0.001$）」において看護倫理を学習した者は、排泄援助において倫理的ジレンマを感じた者の割合が有意に高かった（表３、４）。

倫理的ジレンマを感じた経験がある者の倫理的ジレンマの内容について各得点を算出した。その結果、看護学生と看護師ともに得点が高かったのは「人手が足りず対応に遅れること」「大部屋での排泄援助」で、反対に両者とも得点が低かったのは「排泄設備の不備」「ケア用

表３　倫理的ジレンマの有無

N = 146（%）

	看護学生 n = 97	看護師 n = 49	p値
あり	32(33.0)	38(77.6)	< 0.001***
なし	63(64.9)	9(18.4)	

χ^2検定（***p < 0.001）

表４　倫理的ジレンマの有無に関わる因子

		倫理的ジレンマの有無		
		あり	なし	p値
看護倫理学の学習	あり　n = 18	16	2	< 0.001***
	なし　n = 122	52	70	
授業の一部	あり　n = 120	53	67	0.011*
	なし　n = 20	15	5	
倫理カンファレンスの学習	あり　n = 43	34	9	< 0.001***
	なし　n = 103	34	63	
倫理に関する研修	あり　n = 12	9	3	0.055
	なし　n = 128	59	69	
排泄援助の経験	あり　n = 104	64	40	< 0.001***
	なし　n = 38	6	32	
排泄援助を受けた経験	あり　n = 17	12	5	0.650
	なし　n = 122	57	65	

χ^2検定（*p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001）

表５　倫理的ジレンマの内容

項目		平均点（看護学生 n = 32（%）／看護師 n = 38（%））	p値
１．人手が足りず業務的になること	看護学生	4.03 ± 0.93	0.374
	看護師	4.24 ± 0.79	
２．人手が足りず対応が遅れること	看護学生	4.31 ± 0.64	0.455
	看護師	4.42 ± 0.64	
３．対象に応じた援助方法の確立困難	看護学生	3.84 ± 0.99	0.287
	看護師	3.61 ± 0.99	
４．夜間の排泄援助	看護学生	2.69 ± 1.15	0.026*
	看護師	3.34 ± 0.97	
５．大部屋での排泄援助	看護学生	4.19 ± 1.06	0.821
	看護師	4.29 ± 0.65	
６．自身の援助に対して	看護学生	3.31 ± 1.06	0.675
	看護師	3.42 ± 0.97	
７．スタッフの意識の低さや援助に対して	看護学生	3.41 ± 1.19	0.102
	看護師	3.00 ± 0.97	
８．家族との意識のずれ	看護学生	2.78 ± 1.04	0.033*
	看護師	3.27 ± 0.93	
９．患者との意識のずれ	看護学生	3.16 ± 1.05	0.339
	看護師	3.35 ± 0.79	
10．ニーズに応じた援助ができていないこと	看護学生	3.69 ± 0.97	0.400
	看護師	3.49 ± 1.04	
11．ニーズの把握が困難であること	看護学生	3.50 ± 1.16	0.459
	看護師	3.35 ± 1.11	
12．排泄設備の不備	看護学生	2.69 ± 0.97	0.091
	看護師	3.08 ± 1.01	
13．ケア用品の不備・不足	看護学生	2.74 ± 0.97	0.097
	看護師	3.13 ± 0.98	

Mann-WhitneyのＵ検定（* $p < 0.05$）

品の不備・不足」であった。（表５）。

「家族との意識のずれ」について看護学生2.78点、看護師3.27点であり、有意差が認められた（$p = 0.033$）。「夜間の排泄援助」について看護学生2.69点、看護師3.34点であった。看護師の方が倫理的ジレンマに感じる傾向にあり、有意差が認められた（$p = 0.026$）。

４．排泄援助における倫理的行動の実践状況について

全ての項目について「いつもする」「時々する」が８割以上であった。27項目のうち看護学生と看護師の間に有意差が認められたのは「患者に関心を持つ」「患者の立場にたつ」「患者の心に目を向ける」「患者の感情や話を受け止める」「いたわりの態度で接する」「いやしの気持ちを持つ」「患者の心を開かせる言動や気持ちを持つ」「丁寧なケアを行う」の８項目であった（表６）。

排泄援助における倫理的行動の実践状況について、看護学生では「差別しない」「患者の立場にたつ」「丁寧なケアを行う」が平均4.86点で最も高く、「専門知識を使う」が4.35点で最も低かった。看護師では「差別しない」が4.92点で最も高く、「いやしの気持ちを持つ」が4.02点で最も低かった。

Ⅴ．考　　察

１．排泄援助に対する認識

排泄援助に対し、「大変だと思う」「嫌だと思う」「仕事だから仕方ないと思う」の項目に「そう思う」「どちらかと言うとそう思う」と回答する者は看護学生に多く、二重作ら[1]の研究と同様に看護学生の方がより消極的に捉えていることが明らかになった。看護学生は患者の身体や排泄器に接触する排泄援助に対して当惑や羞恥、不快、嫌悪等[7]を感じ、消極的に捉えていることが考えられる。

また、「倫理的配慮は重要だと思う」の項目に対して、「そう思う」と回答した者の割合において、看護学生が看護師と比較して有意に高かったが、両群とも全員が「そう思う」と「どちらかと言うとそう思う」と回答した。池田らは、看護師が行う排泄援助は患者との共同行

表６　排泄援助における倫理的行動の実践状況（排泄援助経験あり）

項目		看護学生　n = 57（%） 看護師　n = 49（%） 平均点	p 値
１．プライバシーを保護する	看護学生	4.73 ± 0.43	0.056
	看護師	4.90 ± 0.31	
２．人権を尊重する	看護学生	4.75 ± 0.43	0.300
	看護師	4.84 ± 0.37	
３．差別しない	看護学生	4.86 ± 0.40	0.476
	看護師	4.92 ± 0.28	
４．患者に関心を持つ	看護学生	4.84 ± 0.41	0.047*
	看護師	4.69 ± 0.47	
５．患者の立場にたつ	看護学生	4.86 ± 0.35	0.012*
	看護師	4.63 ± 0.53	
６．患者の心に目を向ける	看護学生	4.74 ± 0.52	0.013*
	看護師	4.52 ± 0.51	
７．患者の感情や話を受け止める	看護学生	4.81 ± 0.44	0.001*
	看護師	4.50 ± 0.55	
８．安心を与える	看護学生	4.56 ± 0.60	0.490
	看護師	4.52 ± 0.51	
９．安らぎ（安楽）を提供する	看護学生	4.54 ± 0.57	0.379
	看護師	4.44 ± 0.62	
10. 援助的態度で接する	看護学生	4.68 ± 0.54	0.820
	看護師	4.67 ± 0.52	
11. いたわりの態度で接する	看護学生	4.68 ± 0.60	0.049*
	看護師	4.45 ± 0.78	
12. いやしの気持ちを持つ	看護学生	4.46 ± 0.68	0.029*
	看護師	4.02 ± 1.06	
13. 誠意を持って接する	看護学生	4.79 ± 0.41	0.372
	看護師	4.71 ± 0.46	
14. 謙虚に患者に接する	看護学生	4.77 ± 0.47	0.205
	看護師	4.63 ± 0.61	
15. 患者の心を開かせる言動や気持ちを持つ	看護学生	4.58 ± 0.57	0.046*
	看護師	4.31 ± 0.71	
16. 患者の代弁者となる	看護学生	4.40 ± 0.73	0.274
	看護師	4.27 ± 0.74	
17. 自尊心（羞恥心）を尊重する	看護学生	4.84 ± 0.37	0.866
	看護師	4.84 ± 0.47	
18. 日常感覚を尊重する	看護学生	4.56 ± 0.60	0.473
	看護師	4.48 ± 0.62	
19. 専門知識を使う	看護学生	4.35 ± 0.64	0.136
	看護師	4.50 ± 0.72	
20. 患者の病状を把握する	看護学生	4.68 ± 0.47	0.136
	看護師	4.81 ± 0.39	
21. 正しい技術で行う	看護学生	4.67 ± 0.48	0.449
	看護師	4.73 ± 0.45	
22. 丁寧なケアを行う	看護学生	4.86 ± 0.35	0.040*
	看護師	4.69 ± 0.47	
23. 個々の患者にあわせた対応を行う	看護学生	4.74 ± 0.48	0.486
	看護師	4.69 ± 0.47	
24. 患者の可能性を見つける	看護学生	4.44 ± 0.66	0.150
	看護師	4.21 ± 0.82	
25. ニーズの把握と正確な対応を行う	看護学生	4.57 ± 0.57	0.375
	看護師	4.49 ± 0.55	
26. 必要不必要なケアを見分ける	看護学生	4.42 ± 0.65	0.477
	看護師	4.52 ± 0.58	
27. 患者の自立を助ける	看護学生	4.65 ± 0.55	0.218
	看護師	4.55 ± 0.50	

Mann-WhitneyのＵ検定（*$p < 0.05$, **$p < 0.01$, ***$p < 0.001$）

為であり、行為の際は「気配を消す」ことを大切にしていると報告した[8]。看護師は倫理的問題を認識しながら排泄援助を行っているという自覚があることが明らかになった。一方、看護学生は倫理的配慮の重要性は認識しているが、臨地実習における経験の機会が限られるため、認識とは別に、患者の羞恥心や１人で排泄援助を行うことへの不安を感じ、消極的な思いになりやすいと報告されている[9]。

２．排泄援助に対する倫理的ジレンマ

「夜間の排泄援助」に対してジレンマに感じている割合は看護師において有意に高かった。看護師は実際に「夜間の排泄援助」を経験していることから、夜間の看護ケアが人手不足のために業務的になったり対応が遅れたりするなど、業務上の対応困難[4]を感じていることが考えられる。

排泄援助において倫理的ジレンマを感じた経験を問う項目に対して「あり」と回答した者は看護学生で約３割、看護師では約８割であった。「倫理的配慮ができているか」に対し、「そう思う」「どちらかというとそう思う」と回答した者は、研修など複数の機会に倫理について学習している看護師の方が有意に高かった。看護学生が倫理的配慮のある排泄援助を行うためには、看護倫理の学習機会と排泄援助の経験を組み合わせて学習する必要があり、看護倫理学や授業の一部、倫理カンファレンスだけでなく、様々な授業や研修会で看護ケアと看護倫理を一体として学習すること、実習や臨床現場で倫理カンファレンスを行うことが有効であると考えられる。

３．排泄援助における倫理的行動の実践状況

「患者の立場にたつ」「患者の心に目を向ける」「患者の感情や話を受け止める」といった心理面に関する項目に対しては看護学生の方が「いつもする」傾向にあり、「専門知識を使う」「患者の病状を把握する」「正しい技術で行う」といった知識や技術に関する項目については看護師の方が「いつもする」傾向にあることが明らかになった。看護学生は一人の患者を受け持ち、ゆっくりと関わることができるが、看護師は複数の患者を担当し排泄援助の内容も多様であることが要因として考えられる。一方、看護学生が看護師のように専門知識・技術を用いて排泄援助を行うためには排泄援助についての学習に加え、疾患を理解し、排泄援助の技術についての学習を深めたり、実習で排泄援助の経験を行ったりすることも必要であると考えられる。折山らの研究[9]において「臨地実習で技術を３回以上経験することが、到達度の向上に有効である」と述べられており、技術の習得には経験の有無だけでなく、繰り返し経験することが必要であると考えられる。しかし、臨地実習を経験した学生の中でも約４割の学生が排泄援助を経験していない。臨地実習における排泄援助の経験の機会は限られていることが推測できるため、学内実習における技術の習得が必要であると考えられる。しかし学内実習においても、学生が患者役をした場合には「実施しやすいように気をつかうので、本当の患者とは違う」や「友達相手なのでいい加減になってしまう」などの意見もある[10]。学内実習で技術の習得を助けるためには、OSCE（客観的臨床能力技術試験）のような学生以外が患者役を行い、一人一人の技術を確認できるような機会があることが重要であると考えられる。

Ⅵ. 今後の課題

看護学生と看護師の排泄援助に対する認識と倫理的ジレンマについて明らかになったが、１つの大学の看護学生と１つの病院の看護師を調査対象としたこと、排泄援助の経験頻度や患者の重症度による倫理的ジレンマに関する調査は行っていないこと、倫理的ジレンマの解消方法などは調査していなかったことから、今後、対象範囲、調査項目をより充実させて研究を深める必要があると考えられる。

Ⅶ. 結　　論

１．看護学生の方が排泄援助を消極的に捉えていた。

２．看護学生の方が排泄援助における倫理的配慮の重要性を感じていた。

３．看護師の方が倫理的ジレンマの経験がある。

４．倫理的配慮のある排泄援助には、排泄援助の経験と看護倫理に関する学習が有効である。

謝　　辞

本研究にご協力頂いた皆様に深く感謝致します。本研究に利益相反はありません。

文　　献

１）二重作清子, 焼山和憲, 薬師寺文子, 他. 看護学生の排泄援助に対する意識調査:「患者－看護婦間」の心

理的距離. 看護展望 2002;27:106-10.
2）青木律子，安藤邑恵，服部紀子．老年看護学臨地実習で学生が「困った」と思った看護援助の分析：排泄への援助の内容とその対処．日本看護学会論文集：看護教育 2005;36:158-60.
3）木下天翔，八代利香．看護学生が臨床実習で体験する倫理的ジレンマ. 日本看護倫理学会誌 2016;8:39-47.
4）嶋添深幸，村上亜紀，大城正樹．看護師の排尿援助に関する意識調査. 化学療法研究所紀要 2008;38:33-7.
5）中嶋利枝，亀山清美，太田くる美．高齢者排泄援助に関する調査研究：看護職のジレンマについて．日本看護学会論文集：老年看護 2006;37:224-6.
6）工藤二郎, 小田日出子, 窪田恵子, 他. 看護のアイデンティティーその６　看護倫理に関する大学生と看護師の価値観の相違とその意味．西南女学院大学紀要 2006;10:1-9.
7）江口信枝，杉原喜代美．患者理解に近づく日常生活の援助技術習得とは：排泄の援助技術から．看護展望 1994;19:1383-7.
8）池田富三香，丸岡直子．排泄援助における看護師の日常倫理. 日本看護倫理学会誌 2016;8:62-9.
9）折山早苗，岡本亜紀．看護学生の実習での技術経験の実態と主観的到達度に影響を及ぼす因子：中国地方の複数の看護系教育機関を対象とした分析．日本看護科学会誌 2015;35:127-35.
10）大西香代子．倫理的な能力をどうはぐくむか：基礎教育の立場から．日本看護学教育学会誌 2005;14:48-53.

（受付　2020年１月８日）